

入賞作品

初めての二人旅

佐京 奈緒美

毎年、夏休みになると、二人の息子は、秋田内陸線に乗って、

祖父母に会いに行くことが何よりの楽しみになっている。今ではもう、長男は中学一年生になり、小学二年生の次男も内陸線の旅は慣れたものである。丁度、長男が次男の年齢だった小学二年生のとき、当時まだ二歳だった次男と一緒に二人旅をさせたことがあった。初めての二人旅である。佐京家にとって、初めての孫であり、幼い頃から病気がちだった長男を大事に大事に手をかけて育ててしまったせいも、自律心に欠ける長男のことを思い、内陸線が大好きだった二人の息子に、阿仁合駅から角館駅まで二人旅をさせてみようと思いついたのだ。今考えてみると、何とも無謀なことをさせてしまったようにも思えるが、阿仁合駅近くで内陸線を見ながら育ててきた息子たちには、そんなハードルの高い旅ではないように思っていたようだ。母親である私も、アテンダントさんと顔見知りとなり、二人旅をさせることを伝えると、快く、「見守っていくから、大丈夫ですよ。」と言って下さり、安心して乗せたことを今でも鮮明に憶えている。どんなにか、心強かったことか、本当にありがたいことであつた。

当時小学二年生だった長男は、内陸線に乗って角館まで行く楽しみと二歳の弟を自分が守ってあげないといけない不安との思いの狭間で、約一時間の内陸線の旅をどのように味わっていたのか、どんなに緊張していたのか、想像すると胸が熱くなる。二人旅をすることで、何でも一人でやることに不安を持ってしまう長男が、少しでも変わるきっかけになってくれればという思いであつた。

「ガッタンゴットン、ガッタンゴットン。」

内陸線の心地よい音を聞きながら、どんな会話をしたのか？二人旅を楽しんでくれただろうか？田んぼアートを見たり、シートの模様を見て楽しんだり、お菓子を食べながら、仲良くお利口さんに乗っていたと後になって、アテンダントさんに教えて頂いた。とてもしっかりしたお兄ちゃんだったと、長男の様子を伺ったときは、とても嬉しかった。角館に到着し、二人仲良く手を繋いで降り立った姿を見て、祖父母は、とてもたくましく見えたと言っていた。自信にあふれたすっきりした顔をしていた。

それからは、毎年自分から、内陸線で行くことを決めている。今年は初めて、JR角館駅で新幹線に乗り換えて大曲駅まで行かせてみた。内陸線の駅員さんに助けてもらったようだが、困ることの経験が少ない息子にとって、とてもいい経験になったようだ。

私にとって、内陸線は子育て鉄道のようだ。毎年乗るたびに、息子たちが成長してくれる。内陸線に手を振ると、車掌さんが手を振って汽笛を鳴らしてくれる。アテンダントさんも気軽に

声をかけてくれる。なんともあつたかい、温もりを感じさせてくれる、唯一無二の鉄道である。息子たちは、私には多くを語ってくれないが、子供たちが大人になったとき、秋田内陸線での思い出がどのように残るのか、とても楽しみである。きつと、内陸線での経験が心の栄養となり、自分の自慢のふる里として、さらにまた子供たちへと、思い出を伝えていってけると信じている。

「ガッタンゴットン、ガッタンゴットン。」

今日も内陸線の音が聞こえる。内陸線を見かけると、自然に足が止まり、手を振る子供たちの姿。阿仁合では、毎日の生活の一コマである。しっかりと、子供たちの中にふる里の風景として内陸線があることが、とてもうれしい。